

『時雨集』について

綿 拔 豊 昭*

A study of a collection of haiku poems *Shigureshu*

Toyoaki WATANUKI

抄録

『時雨集』と題された句集がある。出版目的、刊年、編者、出版社、出版目的については記されていない。そのため、これまで特に注目されたことはないようである。そこで『時雨集』の内容を分析した。その結果、松尾芭蕉の二百回忌にあたって編まれたことがわかった。芭蕉二百回忌は明治二十六年（一八九三）である。したがって『時雨集』の成立も明治二十六年か、その前後である。編纂したのは、信州諏訪地方の有力な俳人であった省我（せいが）である。省我が死んだのは、明治二十七年（一八九四）九月四日である。「時雨」は冬の季語である。したがって明治二十七年に「時雨集」が成立したとは考えがたい。また「取り越し」ということばもみられないので、明治二十六年より前に成立したと考えるよりは、明治二十六年の冬に成立したと考えた方がよいだろう。芭蕉二百回忌の関連行事や出版などは、全国的におこなわれたという点で注目されている。芭蕉二百回忌に関連する句集は、明治時代の俳諧の研究で見過ごすことはできない。『時雨集』は、芭蕉二百回忌に関連する句集の一つとして重要なものである。

Abstract

A collection of haiku poems titled *Shigureshu* seems not to have been paid attention to so much because it has not information about the editor, the publisher and the purpose of publishing it. As a result of analyzing its contents, it became clear that it was compiled on the occasion of the two-hundredth anniversary of Matsuo Basho's death. As it was in the 26th year of Meiji (1893), the *Shigureshu* must have been published in that year or around that year. Seiga, who was a famous haiku poet in Shinshu-Suwa region, compiled it and died on September 4, the 27th year of Meiji (1894). The word "shigure" in haiku indicates that the season is winter. Therefore, it is hard to think that it was compiled in the 27th year of Meiji. In addition, the word "torikoshi", which means "advancing the date" in Japanese, is not in it. In consequence of these reasons, we should consider that it was compiled in the winter of the 26th year of Meiji. Events and publications related to the two-hundredth anniversary of Basho's death attract attention in the way that they were conducted and published all over the country. *Shigureshu* is important in the study of haiku poems in Meiji era as a collection of haiku poems related to the two-hundredth anniversary of Basho's death.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies,
University of Tsukuba

一 はじめに

『時雨集』と題された句集がある。現在、公的機関では天理図書館所蔵本が知られるほか、稿者も所蔵している。稿者所蔵本によって簡略に書誌を記すと以下の通りである。

半紙本一冊。袋綴、四つ目綴。全二十三丁（遊び紙無し）。料紙は楮紙。狐色の表紙。表紙左方に無辺の原題簽、「時雨集」と刷。見返しは、表のそれは赤色の料紙、裏のそれは他の料紙と同じ。序跋無し。本文は木版刷、一面九行、匡郭、界線無し。

出版目的、刊年、編者、出版者（社）については記されておらず、そのためか、これまで特に注目されたことはない句集である。

本稿は、『時雨集』の内容等を分析することによって、この句集が松尾芭蕉二百回忌にあたって、信州諏訪の俳人である省我が編んだものであることを明らかにするものである。

明治二十六年（一八九三）は、俳文芸の歴史において、芭蕉二百回忌の関連行事や出版等が、俳人によって全国的におこなわれたという点で注目され、その一方で、正岡子規が「芭蕉雑談」を発表し、俳句革新の始動の年として注目されている。東明雅は「子規が」芭蕉の偶像を破壊し、古い俳諧を攻撃し始めた」年であり、「まさに芭蕉は没後二百年にして、最も手痛い攻撃を受けた」と述べている（註一）。

正岡子規についてはこれまで研究がすすんでいるものの（註二）、子規が登場した当時、すでに活動していた俳人とその門人、いわゆる「旧派」の俳人については、地域史においてふれられることはあっても、全国的な視野で研究がすすんでいるとはいえない。「旧派」の俳人たちがおこなった芭蕉の二百回忌についても同様である。

しかし、俳文芸の歴史において、全国的におこなわれたものを看過することはできない。青木亮人は以下のように述べる（註三）。

芭蕉二百回忌を取り上げた先学に勝峯晋風『明治俳諧史話』（大誠堂、昭和9）、櫻井武次郎『俳諧史の分岐点』（和泉書院、平成16）などがあるが、その全貌や具体的な内容はいまだ不明点が多い。今後の調査に期待したい。

芭蕉二百回忌関連連事の全貌を明らかにするために、関連行事や出版物などを

一つ一つ洗い出し、それについて検討することは基礎研究として重要であろう。芭蕉の二百回忌の関連の句集については、櫻井武次郎がまとめているが（註4）、本稿でとりあげる『時雨集』はそれに漏れたものである。なお稿者の調査では、公的な機関に所蔵される出版物は、本稿末「出版年表」にあげる三十六点である（註5）。

二 芭蕉二百回忌

現在の石川県金沢市山の上町にある小坂神社は、芭蕉が「奥の細道」の旅のさいに参拝したことで知られる。明治二十六年十一月十二日、その神社で脇起の俳諧の連句がおこなわれた。そのときの模様が当時金沢で発行されていた俳諧雑誌『俳諧新誌』（二十五号）に以下のように記されている（傍線は稿者）。

去る十二日小坂神社内に於て蕙の家連か執行したる花本大明神二百回忌の正式俳諧等は左の如し

脇起俳諧の連歌

冬籠又よりそはん此柱

神詠

紙衣着かへて毫揮ふ朝

甫立

晴上る空高らかに鶯鳴て

希梅

（後略）

「花本大明神」とは芭蕉のことで、発句は「尚白宛書翰」に見られる芭蕉の句である。芭蕉二百回忌にあたり、芭蕉の句を発句に連句がおこなわれたということである。この他、たとえば三森幹雄が明治六年に設立した明倫講社の発刊する雑誌ではしばしば芭蕉を「祖神」と称えており、芭蕉を神とした資料は少なくない。それは芭蕉を神格化して崇拜する明治期の俳人が多かったことをも示している。そうした俳人たちは無論、俳諧を嗜む者たちが、芭蕉の二百回忌にあたって、さまざまな関連行事や、関連出版をおこなったことは、容易に想像されることである。明治二十六年一月に刊行された『俳諧新誌』（十六号）には以下のようにある。

本年は芭蕉翁二百年忌の正当なれば京坂諸国とも諸々盛んなる俳宴を開かる、よし陸統報ありとある。

また明治二十九年に蕙廼家俳壇から刊行された園亭菱文著『俳諧正式鑑』に、

(明治二十六年は)祖翁二百年年忌正当なるが故に日本全国いかなる僻邑辺
 陬到る迄も前後三年が間正式俳諧を執行せざる方なし
 とある。

当時の有名俳諧宗匠の一人である永機は、取り越し二百回忌法要を芭蕉の墓の
 ある義仲寺で七日間にわたっておこなっており、これほどの規模ではないにし
 る、芭蕉二百回忌は各地でおこなわれた。こうした全国的な営みは俳文芸の歴史
 においてのみならず、近代文化史においても注目すべきことであろう。

三 『時雨集』の内容

『時雨集』は、一丁めに「雲心／巻舒／西洲」とある。それ以後は以下の通り
 である。

①連句

芭蕉の句を発句とする脇起の連句で一人一句の歌仙。発句の芭蕉と、挙句の執
 筆を除く三十四名は以下のとおりである。

省我、凍湖、泉残、世外、芒斎、小仙、希斎、松嶺、明京、松甫、松年、滴川、
 如翠、鬼岳、一二三、希心、守听、抱湖、用休、其名、梅屺、菊明、桐陰、春
 窓、涼月、四好、勤岳、良久、きく女、梅居、義碧、木人、若宜、竹支

②発句(各国)

主催者に送られた各国(39ヶ国)の俳人の句。三河の蓬宇、羽後の陰風、出雲
 の曲川など有名宗匠の名も多く見られる。北は北海道から、南は沖縄まで、この
 種のものとしては広範囲である。掲載順に国名を記し、俳人数を数字で示す。同
 国が二カ所に出ている場合は、初出に合計して示す。

三河1・尾張13・遠江3・駿河4・甲斐9・伊豆1・相模3・上野3・下野1・
 下総7・岩代2・仙台2・盛岡2・小樽4・佐渡1・羽前4・羽後3・越後5・
 出雲1・伯耆1・因幡2・豊後1・鹿児島1・沖縄1・播磨1・西京8・大坂
 3・近江2・美濃1・伊勢2・讃岐1・陸中3・青森1・加賀1・常陸1・武
 蔵7・花巻1・上総1・東京74

③連句

省我、蝸堂、竹支の三吟歌仙。

④発句(信濃)

信濃の俳人の句。24句。

⑤連句

雲底、省我、世外、希斎、芒斎、一左、各一句の連句。

⑥発句(国名なし)

国名はないが、信濃の俳人の句。84句。
 以上のように、『時雨集』は、連句三巻、発句二九〇句がおさめられている。

四 成立

先にも記したように、刊記も序跋もなく、『時雨集』の成立年次等に関する情
 報は何ら記されていない。そこで収録俳句から推定をこころみる。

明治時代の旧派の句集は、外題のほかに書名が記されることは稀である。本書
 も外題のみで、内題はない。外題によって書名は『時雨集』となる。

芭蕉の命日に行われる句会を「時雨会」といい、「時雨」は「芭蕉忌」を象徴
 する言葉であることから、旧派の俳人にとって特別な用語である。たとえば、こ
 の句集には次の句が見られる。

a わすられぬ忌日や薫る初しくれ 白隣

b この翁花の本なり時雨会 鶯笠

c 時雨忌や庭に菊焚香や匂ふ 梅居

aに「忌日」、bに「時雨会」、cに「時雨忌」とあることから、この句集が芭
 蕉忌のために編まれたものであることがわかる。また次の句もみられる(傍線は
 稿者)。

月花や慕ひしたふて二百年 蓬宇

時雨来てしくるゝおとや百々林 不退

しのはしき雲や時雨の二百年 逸窓

殊にけふしのふ時雨や二百年 桐陰

世にふりし時雨やこゝに二百年 凍湖

これらの句から芭蕉の二百年忌のおりのもとの知られる。それは明治二十六年
 のことであるから、『時雨集』は明治二十六年もしくはその前後に成ったと考え
 られる。

五 編者

『時雨集』には、編者や発行者に関する情報もない。そこで俳句等から、それを推定してみる。

次の句がある（傍線は稿者）。

しくるゝや栗津にかはる 諏訪の湖 木甫

百年の時雨仰かん 諏訪の湖 耕雨

木甫は越後の、耕雨は伊勢の俳人で、名の知られた宗匠である。何か目的があつて句集が編まれた場合、他の地方の宗匠は挨拶をこめた句をおくることがある。

木甫の句は、本来、芭蕉の命日に諸家の時雨の句を、栗津の義仲寺の廟に供えたことから時雨会がはじまったことをふまえており、栗津にかわつて諏訪湖で時雨会がおこなわれることを詠んだ挨拶の句と解釈できる。また耕雨の句も、諏訪湖で芭蕉を仰ぐというのだから、挨拶の句と解釈できる。もし右の二句が挨拶の句であれば、『時雨集』が信州諏訪湖周辺の俳人によつて編まれたのではないかと推察される。巻頭におかれた連句の拳句が

曙起の諏訪のあたゝか

とあるのも、それを証していよう。

また信濃の俳人の句が多く、各国のものと別扱いされていることもそれを証していよう。とすると

湖に脚さしてやむしくれ哉 曲川

湖も時雨かへして磯日和 松年

とある「湖」は「諏訪湖」のことで、挨拶の句と解釈できる。先に述べたように、①の連句は、脇起で、

脇起

時雨るゝや田のあら株の黒むほと 芭蕉翁

ひつそりとして暮る冬の日 省我

とあり、発句は芭蕉、脇句は省我である。

旧派の句集で最初に連句が置かれる場合、「発句は最も重要な客が詠み、脇句は亭主（主催者）が詠む」という連句の原則が守られることが多い。例をあげる。と、明治二十九年四月に発行された『鶴巻集』は、千葉県鶴巻に住む遊徳庵竹鮮

が四十二歳となり厄年をむかえるため、その除厄のために編まれた句集である。刊記に編者兼発行者は遊徳庵竹鮮であると記されている。序は下総の宗匠旭斎が記している。巻頭に連句が置かれ、

除厄賀

しら梅や浦の潮風四十二咲

旭斎

霞かくれに昇る旭の色

竹鮮

客である旭斎は「四十二咲」と竹鮮の年齢を詠み込んで挨拶し、亭主の竹鮮も「昇る旭」と旭斎の名を詠み込んでこたえている。故人の追善・追福を目的とする連句の場合は、発句は追善される故人、脇句は追善の主催者が詠む。たとえば芭蕉の高弟である北枝の二百年忌の句集『かやつり草』では、巻頭の連句の発句は北枝の句、脇句は主催者の一人である起翠が詠んでいる。『時雨集』も同様にみなすすると、①の連句は、客は芭蕉、それを追善する亭主が省我ということになる。

また巻軸の句も亭主が詠むことが多く、前掲『鶴巻集』の最後の句は

鶯に筆置てきく初音かな

竹鮮

と、亭主の竹鮮が詠んでいる。前掲『かやつり草』は、拳句は「執筆」のため、その前句に注目すると、もう一人の主催者雪袋が詠んでいる。『時雨集』の最後の句は

水仙やぬかつく膝にひと雫

省我

とあり、省我が亭主であると考えられる。

こうしたことから、『時雨集』の編者、または発行者、または編者兼発行者は「省我」である可能性が高い。

諏訪に関係し、「省我」と号する俳人の候補としては「藤森省我」があげられる。明治十二年に刊行された東旭斎編『古今俳諧明治五百題』（発売人朝野利兵衛・出版人江島喜兵衛）の名録に

省我 信州上之諏訪町 藤森勝平

とある。

矢羽勝幸・田子修一編著『近世信濃俳人・俳句全集』（平成十六年、象山社）によれば、藤森省我は、明治二十七年（一八九四）九月四日に没、享年は六十五歳である。上諏訪清水町の人で、幕末期から明治期にかけて俳人番付の上位に登場し、岩波其残とともに諏訪の明治旧派を代表する俳人である。はやくに教林盟社社員になった。たとえば前掲『古今俳諧明治五百題』、その続編『古今俳諧明治

新五百題」(明治一四年刊)に句が載り、明治十二年十月に刊行された広田精知編『明治附合集』(発売人川勝徳次郎・出版人西口忠助)には、「信濃」の俳人の発句を載せた箇所

露白し里の灯かけもたえし比 省我

とある。また芭蕉堂楓城編『閑古集』(明治二十二年十月序)は、『時雨集』と同じく芭蕉二百回忌集の一点であるが、それに句が載る信濃の俳人の二人の内一人である。このように、全国の俳人の句を載せる、旧派の句集に名が載る省我は、全国的によく知られた俳人といえよう。

「省我」が、当時全国的に名の知られた俳人である藤森省我であれば、年齢を考えても、『時雨集』を編み、発行するにふさわしい人物であり、各国の俳人から句が送られたのも首肯される。また先に『時雨集』の成立を明治二十六年前後としたが、編者が藤森省我であれば九月四日に没しているので明治二十七年の成立の可能性は低く、明治二十六年以前の成立となる。

六 おわりに

『時雨集』は、発行目的が記される序や跋がなく、しかも刊記がない。しかし内容を検討した結果、これが芭蕉の二百回忌のものであることが明らかになった。

今後の文芸研究の課題としては、収録された連句がいつおこなわれたか、なぜ編集目的や刊記がなかったか、について明らかにすることや、他の二百回忌句集との比較によって、その特質を明らかにすることがあげられる。

さらに近代文化研究としての課題もある。高橋敏は、近世に「従来の行政制度や社会組織とは異なる教育組織」があったとし、「個々の地域を柔軟に結びつける知のネットワーク」を「手っ取り早く全国規模で一覧できるのは俳諧である」とする。さらに「俳諧の量的普及・浸透を見ることによって教育・文化の置かれた環境の大体の推移が見えてくる」とする(註6)。芭蕉二百回忌は全国的に見られる営みで、そのありようを明らかにすることによって、近世から近代にどのような知のネットワークが継続されたか一覽できよう。

また子規とその門流の「新派」と「旧派」の大きな相違点は連句にある。子規は「個」の芸術を重視し、共同製作である連句に否定的であったが、旧派の宗匠は連句を重視し、皆が寄り集まって一つの作品をなす「場」も重視した。「新派」

も「旧派」も、歳時記に見られるような、「画一的なイメージ」つまり共通の認識・共通の価値観が全国的に必要とされる。しかし、連句は、原則として発句では詠まれない神祇・釈教・恋・無常など、自然・人間のあらゆることを詠み、しかも連句全体としての視野と前句にどのようなように付けるかという、高度なコミュニケーションを要求される。そのため、発句しか詠まない人にはない認識・価値観をも形成する。近世においては、地域によっては、そこに住む人々はほとんど在在を移動することない。そのため、連句では地域的な特色が生じることがある。「時雨」といえば「芭蕉忌」を思う、といった全国的な共通理解とは別に、たとえば、ただ「山」といった場合、京では比叡山を思い浮かべ、津軽では岩木山を思い浮かべる、ということである。連句の場合は、いわば「あれ」「これ」で具体的なものを特定できるように、つまり高度な推測を要請される指示に応じることのできる知識を蓄積する場でもあった。「新派」が主流になることで、大きく変化することになった旧派にみられる細部の地域差を、各地の二百回忌句集を見ることによって明らかにすることも今後の課題である。

【注】

- 1 東明雅「近・現代の連句界と連句誌」(『国文学解釈と鑑賞』六七一号、昭和六十二年五月)。
- 2 正岡子規については、例えば国文学研究の専門誌『国文学解釈と鑑賞』(至文堂)で「正岡子規 没後百年」(八四七号、平成十二年十二月)、同じく国文学研究の専門誌『国文学解釈と教材の研究』(学燈社)で「正岡子規・やわらかな思想」(七〇九号、平成十六年三月)の特集が生まれ、近年では遠藤利國「明治廿五年九月のほととぎす 子規見参」(平成二十二年三月、未知谷)といった明治二十五年の子規像を明らかにしようとした書物もある。研究文献については、平成二年一月から平成十三年九月までのものを収録した渡辺順子「正岡子規参考文献目録」が前掲「正岡子規 没後百年」に掲載される。
- 3 青木亮人「芭蕉二百回忌と『芭蕉雑談』について」(『大阪俳文学研究会』四十四号、平成二十二年十月)。
- 4 櫻井武次郎「芭蕉二百回忌」(『大阪俳文学研究会』三十四号、平成十二年十月)、同「芭蕉二百回忌 補遺」(『大阪俳文学研究会』三十五号、平成十三年)

年 十月)、同「芭蕉二百回忌、再三」(『大阪佛文学研究会』三十六号、平成十四年十月)

5 たとえば竹谷政雄『北陸の俳壇史』(昭和四十四年、北国書林)に「城端の宛文と北園を中心に俳諧の振興が見られ、芭蕉二百年忌法会を執行、その記念句集「すぐれ句集」が出た」とあるが、「すぐれ句集」は今日伝わらず、このような、今日伝わらなかつたもの、個人蔵のものなどを加えれば、少なくとも五十点前後の出版物があったのではないかと思われる。

6 高橋敏『江戸の教育力』(二〇〇七年、ちくま新書692) 一八二―一八三頁。

【附記】本稿をなすにあたり、貴重な御所蔵本を調査させていただきました。書館、及び御教示いただきました秋尾敏氏、鹿島美千代氏に、厚く御礼申し上げます。

【芭蕉二百回忌出版年表】

| | | | |
|---------|------------------------------|----------|-------------------------------|
| 明治8年10月 | 『二百回忌取越翁忌集』(天理図書館他蔵) | 明治24年夏 | 『一枚摺・書名無』(鳴弦文庫蔵) |
| 明治9年10月 | 『翁追善筆の跡集』(天理図書館他蔵) | 明治25年 | 『芭蕉翁建碑落成二百年祭発句大会高評』(弘前市立図書館蔵) |
| 明治10年冬 | 『祭典集』(天理図書館他蔵) | 明治25年 | 『月の友集』(鳴弦文庫他蔵) |
| 明治13年4月 | 『酬恩集』(石川県立図書館月明文庫他蔵) | 明治25年4月 | 『ふたもゝ年集』(鳴弦文庫蔵) |
| 明治16年 | 『蕉跡募修』(芭蕉翁記念館蔵) | 明治25年7月 | 『春光集』(天理図書館他蔵) |
| 明治16年4月 | 『水音集』(岐阜県図書館蔵) | 明治26年 | 『草の餅』(天理図書館他蔵) |
| 明治17年4月 | 『奉納祖翁二百回忌遠忌俳諧之連歌』(天理図書館他蔵) | 明治26年 | 『時雨集』(天理図書館他蔵) |
| 明治21年5月 | 『祖翁二百回忌追福四時混題句集』(天理図書館蔵) | 明治26年 | 『松尾桃青翁之伝』(山梨県図書館) |
| 明治21年仲秋 | 『元祖太白堂桃隣居士二百回忌句集』(国会図書館蔵) | 明治26年春 | 『追福集』(天理図書館他蔵) |
| 明治22年 | 『芭蕉翁二百年祭翁塚建設発句十万輯』(岡山市立図書館蔵) | 明治26年4月 | 『夢の跡』(天理図書館他蔵) |
| 明治22年 | 『閑古集』(芭蕉翁記念館蔵) | 明治26年5月 | 『早苗のみけ』(天理図書館他蔵) |
| 明治24年 | 『翁忌二百年祭発句輯抜粹各上座』(岡山市立図書館蔵) | 明治26年6月 | 『芭蕉翁発句集』(国会図書館蔵) |
| | | 明治26年6月 | 『清流』(芭蕉翁記念館他蔵) |
| | | 明治27年 | 『いなみしふ』(天理図書館他蔵) |
| | | 明治27年 | 『みののけ集』(芭蕉翁記念館他蔵) |
| | | 明治27年 | 『髭ふくろ』(天理図書館他蔵) |
| | | 明治27年5月 | 『深川冬木町芭蕉霊社二百年祭句集』(国会図書館蔵) |
| | | 明治27年6月 | 『潮かしら』(天理図書館他蔵) |
| | | 明治27年6月 | 『華橘集』(国会図書館蔵) |
| | | 明治28年8月 | 『月廻筵』(天理図書館他蔵) |
| | | 明治28年3月 | 『琵琶湖集』(国会図書館他蔵) |
| | | 明治28年4月 | 『穂屋のしをり』(天理図書館他蔵) |
| | | 明治28年11月 | 『桜廻懐古』(芭蕉翁記念館他蔵) |
| | | 明治28年12月 | 『下条俳諧温地の葉』(国会図書館他蔵) |
| | | 明治29年 | 『早稲の香』(富山県立図書館蔵) |
| | | | (平成23年4月19日受付) |
| | | | (平成23年7月12日採録) |